

# 歴史総合の可能性

兵庫教育大学大学院教授 原田智仁

## 1. 生みの苦しみにある歴史総合

昨年暮れ、次期学習指導要領に向けた中教審答申が出され、文科省内でも専門家チームによる検討作業が本格化した。2017年度中の法令化を勘案すると、今秋にも学習指導要領や解説を実質的に完成させる必要があるからだ。しかし歴史総合の作業は難航している。

その最大の理由は前例のない、いわばゼロから出発せざるをえないところにある。世界史探究等の探究科目であれば、従前のB科目をたたき台にして、一定の改訂を加えることはそれほど難しいことではない。しかし、歴史総合はそうはいかない。世界史Aと日本史Aを統合し、近現代史に重点化すればよいと考える向きもあるかもしれないが、歴史総合は「総合」の科目であって、単なる「統合」科目ではない。それに、中学校の歴史的分野や高校の探究科目との接続の論理も明らかにする必要がある。

難航する第2の理由は、歴史の特性にある。同じ新設科目でも地理総合の場合、中教審の検討段階からほとんど議論はなかった。それは地理探究との間で内容のすみ分けがなされていたからである。だが、歴史総合では探究科目との内容のすみ分けはきわめて難しい。近現代史を欠く世界史探究や日本史探究など考えられないからである。では、内容が重複するとどうなるか。大学入試への対応から近現代史は総合で学ばせ、前近代史を生徒の選択に応じて探究科目で学ばせるという形が通例化してしまうおそれがあるのである。

## 2. 歴史総合の方向性とその意味

こうした課題を克服し、中教審答申の趣旨をふまえた歴史カリキュラムがどういう形になるのか。現時点で現実視される方向性を示し、歴史総合の

もつ意味を探ってみたい。

第1に、歴史総合の「総合」の視点はいったいなんなのか。教育である以上、それは目標以外にありえないとすれば、以下の3点が重要になる。①課題の解決を視野にいれ、②世界と日本を広く相互的視野からとらえ、③歴史の大きな転換に着目して、現代的諸課題の形成にかかわる近現代の歴史を考察することである。つまり、旧来の世界史・日本史というわく組みや時系列の思考より、現代的関心からの歴史的考察が重視されており、そこに総合の視点を読み取る必要がある。

第2に、上記の総合の視点にもとづくとすれば、どんな内容構成になるのか。結論を先取りすれば、テーマ的構成になろう。従前のように、通史的構成のなかに一部テーマを組み込むのではなく、全体を日本と世界の相互的視野からなるいくつかのテーマで構成するわけである。そのテーマ設定の視点となるのが、近代化、大衆化、グローバル化と現代的諸課題とのかかわりである。答申が、「近代化（大衆化、グローバル化）と私たち」という形で内容項目を例示した意味はそこにある。また、学習内容の焦点化のために、現代的諸課題につながる歴史的な状況として、自由と制限、富裕と貧困、対立と協調、統合と分化、開発と保全といったわく組みも例示されている。

第3に、歴史総合がテーマ的構成になるとすれば、どのように指導すればよいのか。今回の改訂では、どの教科においても「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。だが、なんでも生徒まかせにすれば主体的になるというわけではないし、グループ学習を組織すれば対話的な学びが生まれるわけでもない。生徒の学習への動機づけや方向づけをはかったり、生徒どうしの話し合いを深い学びに結びつけるべく適切な教材を提

示したりすることは、教師でなくてはできないだろう。歴史総合に求められるのは物知りの教師ではなく、歴史の学び方を知っていて、生徒のニーズに応じて支援することのできる教師だということである。

第4に、テーマにそくして生徒の主体的・対話的で深い学びを成立させるには、どのように授業を構成すればよいのか。これも答えは答申のなかにある。すなわち、「歴史の大きな転換に着目し、単元の基軸となる問いを設け、資料を活用しながら、歴史の学び方（「類似・差異」、「因果関係」に着目する等）を習得」させる構成である。簡単に解説してみよう。

- ・近代化（大衆化、グローバル化）が現代的課題の淵源となるようなテーマを選択する。
- ・それを一つの単元として追究するための基本的問い（Main Question）を設定する。
- ・生徒が問いを追究するために必要な資料を収集して教材化する。
- ・資料を活用しながら、社会事象間の類似や差異を明確にし、また事象どうしを因果関係で関連づけるなどの「見方・考え方」をはたらかせ、課題解決に向かうよう授業展開を構成する。

### 3. 歴史総合における単元のイメージ例

◆単元名「豊かで公正な世界を求めて」

◆基軸となる問い（Main Question）

現代の世界はどのようにして物質的に豊かになったのか？ また、なぜ世界の諸国家間や国内に経済格差が広がっているのか？

◆単元構成の基本的原理

- ・現代的課題意識にもとづく倒叙的構成（現代から過去へ遡及していく内容構成）
- ・中学校までの歴史学習をふまえた構成（地域、日本を学び、それから世界を学ぶ）

◆追究のための問いの例

(1)市場経済の世界化と格差の増大

日本経済は世界のなかでどの程度の豊かさなのか。私たちの生活は祖父母の時代と比べてどのように変化したのか。経済生活の変化が国により違

うのはなぜか。また、なぜ現代世界で貧富の差が拡大しているのか。

(2)市場経済の確立と社会主義の挑戦

近代前夜の江戸時代末期の日本では庶民はどのような経済生活をおくっていたのか。日本に開国を迫った欧米諸国ではどのようにして資本主義経済を確立したのか。資本主義経済が世界に波及したことは、アジア・アフリカ諸地域にどのような変容をもたらしたのか。資本主義による世界の再編と構造化は、どのように進められたのか。資本主義経済の強引な動きに批判や挑戦はなかったのか。

◆単元の展開と事例・資料

(1)市場経済の世界化と格差の増大

- ・現代の若者の生活（衣・食・文化等の世界的均一化）：都市型、ICT、高速輸送
- ・1950年代の生活（祖父母の青年時代、高度経済成長前）：都市と農村、家電の始まり
- ・変化をうながした要因：パクス=アメリカナと国際経済体制、西ヨーロッパ諸国の経済成長と統合への道、日本の高度経済成長とアジア諸国、社会主義諸国の経済停滞と市場経済の導入、グローバル化する経済の光と影

(2)市場経済の確立と社会主義の挑戦

- ・1850年（ペリー来航）ごろの日本：江戸庶民の生活、農村の生活、欧米との技術力の差
- ・欧米諸国の産業革命とその影響：イギリスの産業革命、交通革命、資本主義の確立
- ・日本と清の近代化への動きと挫折：日本の産業革命（殖産興業）、清の洋務運動
- ・列強の帝国主義化と世界分割：大不況、第2次産業革命、アジア・アフリカの植民地化
- ・ソ連の出現と修正資本主義：第一次世界大戦、ロシア革命とソ連の成立、世界恐慌、ソ連の計画経済、ケインズの理論とニューディール
- \*具体的な資料は割愛する。

### 4. 歴史総合を創るのは私たち

単元のイメージ例が示唆するように、歴史総合に定型はない。それぞれの学校で、教師と生徒が協働して創り上げていけるように開かれている。そこに歴史総合の可能性があると考えたい。